

テーマ：図書館でことばを探求する

講師：辞書編纂者・日本語学者 飯間 浩明 氏



平成30年8月29日（火）東京都立中央図書館において開催されたT L A講演会を再構成してまとめたものです。

〇はじめに

私は国語辞典の編さんという仕事をしています。そういう人間が図書館を使うと、どんなところに着目するのか、どんなところで恩恵を受けるのか、あるいは、どんなところで困るのか、といったことをお話しします。まあ雑談ですが、ひとつの参考になれば幸いです。

今日の話は3部構成です。まず1番目は、辞書編さん者というのは何者か、どういうことをやっているのかという話です。

2番目は、辞書編さんをする人間が、図書館に行って一体どんなことをするのかという話。

そして、3番目は、図書館を利用する一市民として、図書館に対して感じていること、思っていることをお話しします。

1 辞書編さんの仕事

私は『三省堂国語辞典』(三国) という辞書に携わっています。皆さんの図書館にも備えていただいていますかね。最新の第7版が2014年に出ました。

表紙に6人の編さん者の名前が書かれていますね。最初に、初代主幹だった見坊豪紀の名前があります。見坊先生はもう亡くなりましたが、他の5人のメンバーは生きていまして、ちゃんと仕事をしています。

「たった5人で辞書がつけれるのか」と疑問に

思われるかもしれませんが、実際やっています。

小所帯で、直接意見を戦わせています。

辞書というのは、できれば少ない人数でつくるのがいいのです。方針が明確になり、全体の統一感が出ます。明治時代、大槻文彦という辞書の神様は、ひとりで『言海』という辞書を完成しました。見坊豪紀も『明解国語辞典』をほぼ独力でつくりました。現代では、さすがにひとりは無理ということで、我々5人で協力しています。

『三国』はスマートフォン用のアプリもあります。今は、紙の辞書を使う人が本当に少なくなりました。国語辞典をつくっていると言うと、「紙の辞書ですか。そんな時代遅れのものをつくる人の話なんか聞きたくない」と言われそうなので、「電子版もありますよ」と宣伝しています。



アプリは2種類あります。ビッグロブおよび物書堂から、デザインは違いますが、同じ内容のものが出ています。お持ちのスマートフォンやタブレットでお使いになれます。有料ですが、ダウ

ンロードしていただくと、旅先でも使えます。

このように、電子版も買ってもらわないと、もう商売にならなくなっています。よく「紙の辞書が使われなくなって残念でしょう」と言われますけれども、別に紙版にこだわってはいません。紙版でなくても、電子版をどんどん買ってもらえればいいと思っています。

ただ、電子版も実はそれほど売れていません。というのも、ネット上では『大辞林』『大辞泉』という辞書が無料で使えるからです。「いつも『大辞林』を使えばすむじゃないか」ということで、それ以外の辞書が顧みられなくなっている状況があります。

さて、スクリーンには、我々が編集会議をしている写真が出ています。一番手前でにっこりほほ笑んでいるのが、NHK放送文化研究所の塩田雄大さん。その向こうが、日本語学界の重鎮、飛田良文先生。それから、国立国語研究所の山崎誠さん。あとの方は三省堂の出版部の方です。

こうした会議を開いて、「この言葉の意味は」とか、「この言葉はもう古いから削ろうか」とかといった、いろいろな問題について話し合います。

具体的な作業は、この編集会議の場ではやりません。持ち帰って、自分ひとりでパソコンの前に向かって作業します。

辞書編さんの主なプロセスを述べておきましょう。まずは「用例採集」。辞書に載せるための言葉の実例を集めるということです。新しい言葉、知らなかった言葉をどんどん採集、記録します。

次に「取捨選択」。採集した言葉を、「これは辞書に載せよう」「これはまだ載せなくてもいい」とより分けていきます。

さらに、「語釈執筆」。載せると決まった言葉の意味の説明を執筆していきます。

一方では、「手入れ」といって、既に載っている

言葉の説明の見直しをします。肌を毎日お手入れするのと同じことですね。もう既に載っている言葉の説明について考え直すことも必要なのです。

細かく言えば、ほかにもいろいろな作業がありますが、この「用例採集」「取捨選択」「語釈執筆」、それから、従来の版の「手入れ」。この4つが辞書づくりの柱になります。

よく見る言葉でも、国語辞典に載っていないものは多くあります。いくつかご紹介しましょう。

例えば、「給茶」。給水車の「給水」という言葉はあります。または給湯室の「給湯」もあるのですが、「給茶」は辞書になかったのです。でも、お茶を入れる機械が最近出てきて、給茶機とか、給茶機のあるところを給茶コーナーと言うなど、「給茶」は日常語になりました。

出光美術館の休憩所で、「あれ、給茶は辞書にないな」と気づき、写真に撮っておきました。後で『三国』を確認してみると、やっぱり載っていない。そうすると、この写真は、辞書に載せる候補を写した重要写真ということになります。



また、居酒屋の看板に「和・旬菜」とあります。「旬菜」は旬のおかずという意味で、近年よく見るようになりました。これも『三国』にはなかったので、最新版で載せました。これで、ほかの辞書も『三国』が『旬菜』という言葉を書いたから、自分たちも遅れないで載せよう」と追随するかと思いましたが、いまだに載せていません。ほかの

辞書は「旬菜」を載せる必要はないと判断した模様です。でも、全国の食べ物屋さん看板やメニューで、ごく普通に目にする言葉です。辞書に記録してもいいのではないのでしょうか。

あるいは、自動販売機に「ほぼほぼ100円」と書いてあるのを見つけました。「ほぼ」を2回重ねています。見てみると、8割ぐらいは100円なんですけど、中に150円の商品がいくつか混じっています。「ほぼほぼ」はこの程度の割合ということでしょうか。

この言い方が気に入らないと言う人もいますが、道を歩いていると普通に目にする場所に「ほぼほぼ」があるのですから、辞書に項目を立てる時期がもう来ています。現在の『三国』でも「ほぼ」のところで軽く言及しているものの、「ほぼほぼ」という独立の見出しがほしいですね。

最後の例です。看板に「合説」とありました。これは学生には常識語ですが、一般人にはわからない人が多い。実は、就職の「合同説明会」の略です。本来は就活のための用語ですが、街の中にまで「合説」という言葉が出てくると、辞書に載る条件が整ってきていると感じます。

以上、私が街で見かけて撮影した言葉の例をお話ししましたが、用例採集の作業は、もちろん、街の中だけで完結するものではありません。作業の中心になるのは、まずは活字媒体です。新聞、雑誌、単行本などから拾うことが多いですね。それから、今の時代、ネットも重要です。ツイッター、フェイスブック、あるいは一般のネット記事から拾うことも多くなりました。

そうやって、日常生活のあらゆるところから言葉の用例を採集し、選り分けていきます。

『三国』の最新版は、2014年に出ています。そこには約4,000語の新規項目があります。全体では約8万の言葉があり、そのうちの4,000語です

から、相当多いでしょう。

辞書には、現れてすぐ消えるような新語は載せませんが、この先、日本語として定着し、使われていくだろうと判断した言葉は、載せるよう努めます。日本語の辞書というのは、今生きて、今の言葉を使っている人たちに提供するものです。そのためには、今使われている言葉をできるだけ入れるのは当然のことです。

国語辞典の中には、現代の新語はあまり入れないで、むしろ、古い言葉をなるべく載せようという姿勢のものもあります。古典を読んだり、近代文学を読んだりするときに役に立つようにしたいという辞書ですね。

『岩波国語辞典』はその代表で、古い言葉がたくさん載っています。新語もありますが、近代以降の百何十年の言葉を広く載せようという姿勢を取っている辞書です。我々の『三国』はもっと現代寄りです。

## 2 図書館に通って意味の説明を書く

国語辞典は、ただ言葉を集めて示すだけの書物ではありません。意味の説明をするのが主な役割です。この意味の説明は、行き当たりばったりで書いてはいません。我々『三国』の場合、ある信念というか、相当な覚悟を持って説明を書いています。

辞書の説明を書くときの要諦と言いますか、気をつけたいことが2つあります。

1つめは、わかりやすく要点を押さえた文章にすること。辞書の説明は、えてして威張っていて、わかりにくい文体で書かれていると思いませんか。辞書風の文体というと、何か尊大な感じがする。何かわかったような、わからないような説明をしているものが多いですね。でも、言葉の意味を知りたい人に説明するのですから、難しいことを言

ってもだめです。「難しいことをやさしく」という姿勢が必要です。

文学や哲学の用語にしても、あるいは社会・経済の用語、自然科学の用語にしても、簡単に説明するためには工夫が必要です。量子力学の専門用語を、我々が腑に落ちるレベルまでかみ砕くというのは難しい。でも、それをあえてやってみようということです。

辞書は、「難しいことをやさしく、やさしいことを深く」わかるように書きたい。しかも、それを2、3行でというかなり厳しい字数制限の中で達成しなくてはなりません。

要諦の2つめは、記述の裏づけを得ること。当たり前なのですが、何となく「この言葉は、まあこういう意味だろう」と、主観で書いてはいけないということです。簡単な言葉でも、ある一語を説明するには、最近のはやりの言葉で言えばエビデンス（証拠）が必要です。

証拠はどこから集めてくるか。ネットで集めることもあります。信頼できるのは書籍です。その書籍はどこにあるかという、はい、そうですね、ここで図書館が出てくるわけです。

その図書館を活用する話は、もう少しお待ちください。まずは、今述べた「説明の2つの要諦」を、それぞれ具体例を挙げてお話しします。

まず、1つめの「わかりやすく要点を押さえた文章」ということについて。

ベトナムの女性の民族衣装に「アオザイ」というのがあります。これをどう説明すればいいかという問題を考えます。

目をつぶるとアオザイのイメージが浮かぶ方もいるでしょう。それは白いきれいな服かもしれませんが、「ベトナムの女性の白いきれいな服装」という説明ではもの足りません。

現在書店に出ている『三国』第7版では、「アオザイ」を次のように説明しています。

**アオザイ** (名) [ベトナム ao dai] ベトナムの女性の民族衣装。上着はぴったりとからだを包み、すそが長く、左右に深い切りこみがいっている。下にズボンをはく。

色のついたのもありますから、別に「白い」と書かなくてもいいんですね。

目下、次の第8版のために、外部の人も含め、みんなで原稿を書いているところです。この「アオザイ」についてある執筆者は次のような修正案を示しました。

**アオザイ** (名) [ベトナム ao dai] ベトナムの女性の民族衣装。上衣は立ちえり、長そででからだをぴったりと包むように仕立てられ、すそは足首まで長く、左右の腰骨あたりまで深いスリット [=切りこみ] がはいっている。下にズボンをはく。

まず「上衣は立ちえり」と記しています。この点は大事な特徴だということで、書き加えた。それから、「長袖」もポイントですね。

さらに、今の第7版では「ぴったりとからだを包み」とありますが、「ぴったりと包むように仕立てられ」と修正されています。

それから、裾の長さ。ただ「長く」というのではなく、「足首まで」と書いています。

それから、スリット、切れ込みが入っているのはどこまでかという、と、「左右の腰骨あたりまで」と書き足されています。

確かに詳しくはなりました。でも、なくてもいい部分もあります。現行版では4行で説明していますが、これが修正案では6行になっています。これを4行に収めたいと考えるわけです。

「立ち襟がある」「長袖だ」という要素は生かしたい。一方、「ぴったりと包むように仕立てられ」

の「仕立てられ」はなくても意味が通る。これは切ってもいいだろう。

それから、「すそは足首まで」の部分。正確に言えばそうでしょうけれど、それを「長いすそ」と言っただけではいけないのか。「それでは、足首までか、すねまでかわからないじゃないか」という意見はあるでしょうが、「大ざっぱに言って、長い服です」という捉え方のほうがすっきりします。

それから、スリットについて。「深いスリット」はいいとしても、「腰骨のあたりまで」とあるという情報は要るだろうか、ということです。

あるにこしたことはないのですが、アオザイという民族衣装を理解する上で、スリットの深さが腰骨のあたりまでという知識は、必ずしも必要ではない。まあ、「深い切れこみがある」で尽くしているでしょう。

そこで、こういうところをばっさり切ってしまうと、また4行に収めました。

**アオザイ** (名) [ベトナム ao dai] ベトナムの女性の民族衣装。上着は立ちえり、長そでで、からだをぴったりと包み、長いすその左右に深いスリット [=切れこみ] がある。下にズボンをはく。

これは原稿段階の文章であり、この先はまた変わるかもしれません。現在のところは、こうなっているということです。

説明は詳しくければ詳しいほどいいわけではありません。簡にして要を得た、「要するにこういうことだ」とわかる説明を書きたいのです。

ネットの百科事典「ウィキペディア」は、これとは対照的な書き方をしています。ウィキペディアの説明は非常に詳しく、全部読むと1時間ぐらいかかる項目もあります。とても有用なものですが、「それほど詳しくなくていい。要するにどういうことか説明してくれ」というときに、『三国』を

引いてみてはどうでしょう。

次に、「説明の要諦」の2つめ、「記述の裏づけを得る」について。

言葉の説明を執筆するときにはエビデンスが必要だということは述べました、では、その証拠資料をどうやって集めていくか。

具体的な例を挙げて話しましょう。私自身のケースを紹介すべきところですが、その前に、私の尊敬する見坊豪紀による調査のエピソードをいくつか紹介します。

『三国』の初代主幹だった見坊は、現代日本語の変化を記録するため、日々、あらゆるところから言葉の用例を採集し続けました。言葉を記したカードの枚数は、亡くなるまでに145万枚を超えていました。

あるとき、見坊は「はぐくむ」を「育む」と表記する例はあるか、という質問を受けました。今ならば、常用漢字の「育」の読みに「はぐくむ」が入っており、そんな疑問は生じないでしょうが、かつてはそういうことが問題になったのです。

実際に小説の中で「はぐくむ」と読んでいる、と答えるためには、その実例が必要です。今だったら、ネットで「育む」と入力して、リターンキーをポンと押せば、例はいくらでも出てきます。何百万と出てくるでしょう。ところが、1960～70年代の、まだインターネットもなければ、パソコンもなかった時代です。そんな例は簡単に集められるものではありません。見坊は大量の文章を読みあさったあげく、1カ月かかって「育む」という表記の例を見出したといいます。

あるいは、「浮き足立つ」という言葉。これも、そういう言葉があるか、どういうふうに使われているか、それを実例をもとに説明しようとして、調べるのに1年以上かかったそうです。

見坊がたくさんの言葉のカードをつくったのは、それぞれの言葉の使われ方の証拠、エビデンスを得るためでした。いわば使命感に駆られて、たくさんの言葉の実例を記録した。用例採集を嫌でもやらなければいけなかったのです。

見坊の用例採集の中で劇的なエピソードと言えば、「世間ずれ」を外すことはできません。

「世間ずれ」は現在、2つの意味で理解されています。本来は「世間ですれること」という意味でした。若者が社会に出ると、いろいろな苦勞をします。それによって、初めは純真だった心がだんだんすれて、悪賢くなってくる。場合によっては悪の道に足を踏み入れてしまう。これがもともとの「世間ずれ」です。

ところが、1970年代ぐらいから、新しい意味が広まってきました。それは「世間とずれていること」という意味です。ちょっとぼんやりして、浮世離れしているという意味が現れた。言語感覚の鋭い人は、そのことに1970年代には気づいていました。

見坊はそうした意味変化の情報を元に、「世間ずれ」が「世間とずれて、浮世離れすること」の意味で使われている例を探しました。無数の文章の中をさまよいつつ、目指す例を採集するまでに、実に6年以上もかかったそうです。

見坊が苦勞して見つけた「世間ずれ」の新用法の実例はカードに記録され、今日も残っています。カードの実物写真をお目にかけましょう。

先ほど、採集したカードが145万枚を超えたと言いましたが、現在、それらのカードは八王子の三省堂流通センターに保管されています。センターの中には書庫があり、「見坊カード」がぎっしり詰まっています。

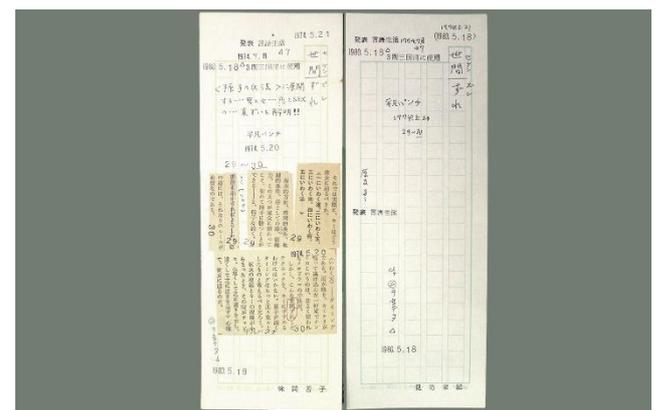


この書庫はハンドルを回して棚を動かす可動書架ですが、その中に入って見回してみると、145万枚というカードの膨大さが実感できます。私を含め、普通の人間には到底集められない規模です。

1つのカードケースの中に何千枚かのカードが入っています。このケースが書棚にずらっと並んでいます。ざっと計算しても、確かに145万ぐらいはあると考えられます。

七夕の短冊のような長方形のカードに、記事が貼り付けてあります。そして、出典名や年月日、さらに何ページ、新聞ならば何面という情報が書き込んであります。

「世間ずれ」について記したカードもこの中にあります。この写真がそうです。



カードに貼られているのは、見坊が「世間ずれ」の新しい例を最初に拾った、まさにその雑誌の記事です。『平凡パンチ』1974年5月20日号と書いてあります。

この記事は若者にデートの方法を教えるものです。奥手の読者に、彼女とつき合う方法を伝授し

よう、というわけで、忍者の巻物のように「天・地・人」に分けて指南をしているものです。

原文を見てみましょう。「いわく天」、これは天の方法です。「タイミングである。雨が降り、雷が鳴って逃げ込んだ一軒家でナントカというのは、昔よく使われたメロドラマの手法だ。しかし、こんな世間ずれしたテクニックを、キミにすすめるわけにはいかない」と書いてあります。

つまり、デート中、雨に降り込められた一軒家で彼女と仲よくなりなさいという助言は、ちょっと世間とずれているということです。浮世離れしていて、読者に勧めるわけにはいかないと書いてある。この「世間ずれ」は新用法です。

1974年にこの例に到達した見坊は「証拠おさえたァ、という感じ」と書いています。新しい意味が生じているはずだ、でも、どうも確証が得られなかった。でも、ついにその証拠を見つけたと快哉を叫んだ。エビデンス、証拠となる実例に基づいて辞書を記述することが、かくも難しかったということを表しています。

見坊豪紀についての話が、つつい長くなりました。今度は、私がどんなふうに証拠を調べるか、そのことをお話ししなければなりません。見坊の鬼気迫る用例採集とは比べものになりませんが、例として、「深川めし」など二、三の言葉を取り上げることにします。

「深川めし」は『三国』になかったので、第7版で載せたいと考えました。載せる場合、見出しは「深川めし」としたほうがいいのか、「深川どん」としたほうがいいのか、悩みました。

深川めし、もしくは深川どんは、ご承知のように、東京・深川名物のあさりどんぶりのことです。これを本来は何と言ったかという問題です。

きっかけは、深川を探訪したときに見た文字でした。写真をご覧くださいませ。「深川めし」

と書いてあるものもあれば、「深川どん」もあります。現在は、両方の名前が併存しています。



ここで、いよいよ図書館を利用することになります。まずは、新聞の縮刷版を見てみました。

現在は朝日新聞にしろ、読売新聞にしろ、データベースがすごく充実しています。朝日には「聞蔵」、読売には「ヨミダス歴史館」があって、明治以来の全ての記事がキーワードで検索できます。1980年代以降は全文検索できるという、すごく恵まれた時代になっています。さっそく記事を検索してみます。

1961年の朝日新聞、料理面の「おそうぎのヒント」には「深川どんぶり」と書いてあります。「むき身のアサリをたっぷりかけたご飯を深川どんぶりとよんでいます」とあります。

説明を読むと、今日我々が言う料理と同じものらしい。この欄では「深川どんぶり」で、「深川どん」ではないんです。

現在は「牛どん」「天どん」など、全部「どん」と発音しますが、昔はむしろ「どんぶり」と言っていました。「玉子どん」ではなく、「玉子どんぶり」です。「井」という字は「どんぶり」と読むのが普通だった。朝日の記事も略していません。

また、朝日の1974年の記事では「深川めし」と書かれています。説明を読んでみます。「ネギ、油揚げ、豆腐を刻んで、ミソと一緒にあさりのむき身を煮込んだものを、どんぶり飯へかけて食べる

のを江戸っ子は好んだらしい。これを『深川めし』と呼んで、まだ『牛めし』が普及しない以前からはやっていたらしい。ここでは「深川めし」です。また、「牛どん」ではなく「牛めし」です。

次に、作家の玉川一郎が、1976年に読売新聞に書いた文章。ここには、「庶民に親しまれた屋台の深川飯」、その後に括弧して、「深川丼=どんぶり=」と書いてあります。「……が、昭和十五年ごろをさかいとして消え去ったのは、どうしてだろう」とあります。ここでも「深川めし」です。

玉川一郎のこの記事を読むと、不思議な気持ちになります。1970年代にはこの料理は誰も食べなくなっていたというんですね。

1980年の朝日夕刊の記事からも、そのことがわかります。中央区の読者の投書です。「戦前、東京・深川に住んでいた時、母がよくアサリの混ぜご飯を作ってくれました。この懐かしいおふくろの味を「深川めし」と名付け、いまではわが家のふるさと料理として、ときどき食卓をにぎわせています」とあります。

1980年の時点でも、この料理が現在のものではなくて、戦前にあった懐かしいものという扱いになっています。

そのほか、深川めし、深川どんぶりに関する辞典類、書籍を調べてみましたが、呼び名は「深川めし」が多いようでした。漠然と、「深川めし」のほうに古そうだという感触を持ちます。

ここからは推測になってしまいますが、どんぶりというと、江戸時代はうなぎどんぶりのことを指し、ほかの料理を「〇〇どん(ぶり)」とは言いませんでした。「牛どん」も、明治・大正時代は「牛めし」でした。こうしたことから、このあさりの料理が昔からあったとしたら、どんぶりとは区別して、「めし」と称したろうと思います。

深川飯の伝統がいったん切れたことは確かなよ

うです。昭和ヒトケタ生まれの筆者が「深川めし」については知らない。人に尋ねてもみたが、知る人はいなかった」と記した文章が、1978年にあります(『国立国会図書館月報』208号)。やはり1970年代の文章として、深川飯なんて知らないという人がいたわけです。

『たべもの起源事典』の「深川飯(めし)」の項目によれば、昔からこの料理はあったけれども、「1988年(昭和63)に、東京駅の駅弁に採用される」と書いてあります。ほかの本もあわせて見ると、この駅弁が深川めし復活のきっかけだったようです。弁当ですから、汁をぶっかけるわけにはいかないので、駅弁として出せるよう、炊き込みのあさりごはんをつくった。

このころから、昔の深川めしを再現しようというお店も出てきて、1980年代以降、あさりごはんのことを深川どんと称して、深川で名物として売られるようになったということらしいのです。

ということをおお体調べたところで、私はこの語釈を書きました。

**ふかがわめし**〔深川(飯)〕ラカガハ(名)〔  
料〕アサリをネギなどとみそしるで煮こみ、  
どんぶりごはんにかけた料理。たきこみごは  
んにもする。深川井(ドン)〔東京・深川地  
区の名物〕

見出しは「深川飯」としました。最後の「たきこみごはんにもする」は、東京駅なんかで出している弁当を念頭に置いたものです。

説明の末尾に「深川井(ドン)」と書きまして、「深川どん」のほうを少し軽い扱いにしました。「深川めし」とどちらが古いか、推測の域を出ないまま、このように記した次第です。

「深川めし」の古さは今ひとつはっきりしませんので、もう少し確実な証拠のある話をします。

「募金」という言葉はどうでしょうか。

「募金」の意味はしばしば問題になります。現在の『岩波国語辞典』では、「募金」には誤りの用法があらわれていると説明しています。

「<sup>きよきん</sup>醸金・寄付する行為の意は一九八〇年ごろ学校から広まった誤用で、現在かなり多用」

どういことでしょうか。「募金」というのはお金を募ることです。だから、例えば、「被災地のためにお金を出してください」と、呼びかける側が使う言葉です。

ところが、『岩波』によれば、1980年ごろから、<sup>きよきん</sup>醸金をする、お金を出すほうも募金と言うようになったというのです。先生が学校で「募金のお金を持ってきなさい」と言ったら、子供たちがそれを誤解して、出すほうのお金のことを募金というのではないかと考えた。そうして新しい意味が広まったのだ、という説明です。

『岩波』は「誤用」と記しますが、これを誤用と見なすべきかどうかは議論の余地があります。ともあれ、新しい意味が広がったことは確かです。

「募金」は、募るお金だったのが、寄付するお金も指すようになった。それは事実として動きませんが、私には、「一九八〇年ごろ」という数字に納得がいきませんでした。

何をもって1980年と言えるのでしょうか。もっと調べてみたら、さらに前からこの用法の例は出てくるのではないか。そう思って、1980年よりも前の例を探し始めました。

どうやって探せばいいか。こういうときの常套手段として、まずはネットに頼ります。グーグルブックスという、ネットで本の中の内容を検索できるサービスがありますね。そのサイトで「募金」を含むいくつかのキーワードを組み合わせて検索しました。とりわけ、1980年以前の文献が出てこないかと思って調べました。

そうすると、政府刊行物の中に、どうもそれらしい使い方の例が出てきました。ただ、グーグルブックスというのは、文字化けがひどく、ネット上で見ただけだと、これが本当に求める例なのかどうか、はっきりわかりません。



一方で、国会会議録も調べてみました。インターネットで閲覧できる衆参の国会会議録を検索すると、1976年の会議の中で、寄付するお金を募金と言っているらしい例が見つかりました。

「いま年末を控えて、必死になってどう年を越していこうか、生き延びていこうかということです。慈善なべが並んで、そしてあたかも苦しい人のために募金してくださいと、寒空の中で鈴が鳴っているようなのはそらぞらしいのじゃありませんか」とあります。

「募金してください」と言っていますから、これは「寄付してください」の意味でしょう。それが1976年にはあらわれている。だから、『岩波』が言っていた1980年よりは少しさかのぼりました。でも、たかだか4年のことです。これでは、1980年より前からあるぞと大威張りでは言えません。

もっと前の例はないか。そこで、先ほどのグーグルブックスの検索結果を検証することになります。こちらの都立中央図書館に足を運びまして、目的の文献を閲覧しました。

その文献は、内閣総理大臣官房広報室『昭和41年版 世論調査年鑑』というもので、これは、この

年に行われた世論調査、いろいろな会社や団体が行ったアンケートを1冊の本にまとめたものです。すごい年鑑ですね。

その中のある調査に、こういう文言がありました。「あなたは赤い羽根(国民たすけあい共同募金)に協力しましたか」という問いに対して、「すすんで募金した」「みんながしたから募金した」「あまりしたくないが仕方なく募金した」「募金しなかった」などと書いてあります。

これは一体、お金を募るほうなのでしょうか、それともお金を寄付するほうなのでしょうか。進んでお金を募りましたとか、みんながお金を募っていたので、自分も仕方なく募ったというのは不自然です。したがって、これは寄付したほう、お金を出したほうだと考えられます。

この調査は、昭和41(1966)年の年鑑に載っていますが、前年1965年に実施されたものです。「募金」という言葉は、かなり前から寄付する意味で使っていたことが明らかになりました。

グーグルブックスだけでは確証が得られませんが、図書館で実際の文献を見て、間違いなことが分かったという例です。

さらに調べてみれば、1960年代よりももっとさかのぼるかもしれません。ただ、赤い羽根共同募金運動が広まったのは戦後ですから、新しい用法も戦後に広まったのだろうと推測されます。

次は、国会図書館を利用して調べた話です。嫌だという方がいらっしゃったら申し訳ないのですが、「ゴキブリ」という言葉について、辞書で説明しようと考えたのが発端でした。

我々の辞書で「ゴキブリ」の語源について書きたいと考えました。説明自体は難しくありません。「御器(ごき)」をかぶるから「ゴキブリ」です。御器というのは食器ですね。食器をかぶる(=か

じる)から「ゴキカブリ」、それが約まって「ゴキブリ」になったのです。

「ゴキカブリ」という語形は方言に残っているといいます。調査報告によれば、東日本では多く「ゴキブリ」を使います。一方、西日本では「アブラムシ」が多い。そのほか「ゴキカブリ」という言い方が西日本を中心に使われています。

ただ、方言も時代とともに変わります。ある方言調査の結果が、現在でも通用するかどうかは、はっきりしない場合もあります。「ゴキブリ」の方言は、現代でも使われているのだろうか、と疑問に思いました。

いろいろ考えているうちに、昔、ドラマで大阪の登場人物が「ゴキカブリ」と言っていたことを思い出しました。漠然としか覚えていないあのドラマは何という題だったか、と気になりました。

中学生のころ、NHKの銀河テレビ小説というドラマのシリーズがありました。このシリーズは、いろいろなドラマを短いクールで放送するものです。そのうちのひとつだったはずですが、どの作品だったか、思い出せませんでした。

私が中学生のころといえば、1980~82年です。その期間の銀河テレビ小説で、大阪が舞台で、大阪の人が「ゴキカブリ」と言いそうな作品はどれだろうと考えました。

だんだん辞書の説明と関係なくなってきた気もしますが……自分が「ゴキカブリ」と聞いた実例を確認したいということです。

ここでは、ウィキペディアが非常に役立ちます。銀河テレビ小説のタイトル一覧というのがあって、1970~80年代の作品が全部出ています。

「これは大阪が舞台だろうか」「これはどうだろうか」と、タイトルをひとつひとつクリックしていった、説明を読みます。「これは東京の話だから違う」「これは北海道だ」と、該当しない作品

を消していきます。それでも、大阪が舞台になったものがどうしても出てきません。

中には、資料がないものもありました。108 番目の「極楽日記」。リストでは赤文字になっていました。赤文字はリンクをクリックしても、その先に説明がないということです。「どうもこれが怪しい」とにらみまして、別のサイトで「極楽日記」のストーリーを見てみたら、大阪の話だと書いてありました。私はもう「ゴキカブリ」というせりふしか覚えておらず、誰が出演していたかなどは忘れていましたが、これが可能性が高そうです。

国会図書館には、ドラマのシナリオがある程度まとまって保存してあります。さっそく出かけて、資料を請求すると、目的のものが得られました。銀河テレビ小説「極楽日記」1980年9月16日放送の台本です。たつこのとおばあさんが言うせりふに、問題の言葉が出てきます。台本ではゴキカブリではなくて、ゴッカブリとなっています。

「いやーッ、ゴッカブリが歩いとおる！ とにかく、そんなしょうないことは自分で解決しなはれ」

電話をしていると、そこにゴッカブリが出てきたというシチュエーションでした。

ああ、中学のときに聞いたせりふは確かに記憶違いではなかった、確認できてよかった、と満足しました。

「ゴキブリ」の語源についての説明は現在執筆中です。完成形は次の第8版でお目見えすることになるはずですが。その説明を書くために、はたして銀河テレビ小説の「極楽日記」を見る必要があったかどうかについては、疑問をお感じになるかもしれません。私としては、こういうことも全て押さえた上で説明を書きたかったのです。無駄足、回り道のような感じですが、どこかで役に立っているんじゃないかと考えています。

### 3 図書館の利用者として思うこと

今日の最後の話です。ここからの話は、私だけでなく、どなたでも言えることかもしれません。一般市民は図書館をこういうふうに使っている、こう考えている、ということとお考えください。

ここでは3つのことを話します。1つめは、私は図書館相互の連携による恩恵を大いに受けていて、とてもありがたい、という感謝のお話です。

私は、今は中央区に住んでいますが、去年まで東村山市に住んでいました。東村山市はすぐ隣がもう所沢市ですから、文化的には東京よりも埼玉にかなり近いですね。

都心に出るのも、やや面倒くさいところに住んでいました。東村山から新宿まで西武新宿線の急行に乗って20分、そこからさらに都立中央図書館や国会図書館に行くためには、また何十分かかかります。都心の図書館に行くというのは一日仕事になってしまいます。

本を見てパッと帰るだけなら、それほど時間はかかりません。ただ、東村山からわざわざ新宿、渋谷に出て行くからには、そこで一挙にほかの用事もすませてしまおうとします。デパートで買い物をするとか、本屋さんで本を買うとか、いろいろやるものですから、昼間に行っても、帰ってくるのは夜になってしまうという具合でした。

それで、東村山に住んでいますと、都立図書館に来るのは、言うては何ですが、非常におっくうなのです。あんまり行きたくない。国会図書館なんかもう絶対行かないというような、知的には非常に怠惰な生活を送っておりました。

また、私は早稲田大学で非常勤講師をしていて、図書館を使うことができます。早稲田の図書館には、かなりおもしろい本が入っていますし、蔵書も多いですから、有効利用すると、大いに成果が得られます。ところが、その早稲田に行くの

さえも面倒くさく、授業以外では行きたくない、非常に情けないことを考えていました。

読みたい本があるときには、図書館を利用せずに、ネットで古書を買って、家で読むほうがよっぽど楽だ、電車賃を考えたらこっちのほうが良いなどと、そんなことを考えてもいました。

ところが、東村山に住んでしばらくたつと、図書館もけっこう利用できることに気がつきました。というのは、図書館同士のネットワークがあるからです。皆さんはそれを運営されている側ですから、「そんなことも知らなかったのか」と言われそうですね。

東村山市役所の隣に、中央図書館という、さほど大きくない図書館があります。そこになれば、家に帰ってネットで注文するというのが最初のパターンだったのですが、やがて、ネット上で、東京都内の図書館を横断検索するシステムが整備されてきました。

私が東村山に初めて住んだころは、ほかの市や区の図書館はネットワークでつながっていましたが、なぜか東村山だけ、ネットワークに参加していませんでした。それで、市の図書館になれば、もう諦めるしかないと考えていました。



それが、やがて東村山も東京都のネットワークにつながりまして、目当ての本が地元になくても、隣の小平市にはあるという情報がわかるようになりました。あるいは、小平のさらに隣の国分寺市、

府中市などに行くと、普通に本が揃うのです。東村山のような都心から離れたところにおいても、全然不自由ではないということに気がつきました。

私は車を持っていませんけれども、自転車に乗って東村山から隣の小平に行くなんていうのは、全くへっちゃらなんです。さらにちょっと遠出をして、国分寺市に自転車で行くこともできる。自転車でなければバスもあり、このぐらいなら手間ではないと気がつきました。そして、近隣の図書館で本を調達するようになりました。

東村山や小平で専門的な本が揃うわけがないと思っていましたが、偏見でした。それぞれの図書館は少しずつ本を持っていますから、ある図書館にない本でも、相互の連携によって、近隣から借りることができます。

私などが欲しが本は、100パーセントではありませんが、8割ぐらいは地元で揃ってしまいます。あとの2割を都立中央図書館などで閲覧するというふうになり、図書館のネットワークは素晴らしいものだと感じました。

なんだか当たり前のことを言っただけですけども、こういうことも知らない利用者は多いはず。ほしい本がなくても諦めず、隣の市や区に行くと結構揃うものだというのを、もっと宣伝していただくといいと思います。

2つめの話です。私の本の借り方は、一般からすると少し変わっているかもしれませんが。読書をするために借りるということはあまりなくて、多くの場合、さっきの「ゴキブリ」のように、目当ての言葉が出てくるか、出てこないかということを確認するために資料を読むのです。

何しろ、ほしい本が漠然としていますから、司書の方もご迷惑だろうと思います。

ある図書館を利用した時のことです。ここでは、

閉架書庫の本を請求できるのは 20 冊程度までだったでしょうか。自分の求める言葉が載っているであろう本を請求カードに書いて、司書の方と思われる窓口の職員に渡します。すると、用意できた本から受け取ることができます。

ところが、受け取ったその 20 冊を見ても、目指す言葉が載っていないことがあります。「ああ、これじゃなかった。それなら多分この本だろう」とまた 20 冊ぐらいを請求カードに書いて、閲覧をお願いするわけです。

あるとき、それをかなり集中的にやっていました。そのときの窓口の職員の方は、男性の方でしたけれども、だんだん表情が陰しくなってきたように見えました。私の思い込みかもしれませんが、「おまえ、いいかげんにしろよ」と思われているような気がしました。口に出して言われているわけではないので、「いや、別にあなたをからかっているわけではないんです」と説明するわけにもいかず、心の中で恐縮しながら本を調べていました。

ここで申し上げたいのは、図書館を利用する理由、本を閲覧する理由は、人によって千差万別だということです。普通に読書をしたい人もいれば、ちょっと調べ物をしたい人もいます。私のように、ある言葉があるかないかだけを確認するために、その図書館の本を閲覧したい人もいます。

私の本の利用法はかなり変わっているかもしれませんが。それでも、こちらとしては極めて真面目な目的で——もっとも、その真面目というのが「ゴキブリ」だったりするわけですが——ある言葉を見つけるために、本を片っ端から見る、ということもあるのです。

もし、不審な利用の仕方をする人がいたとしても、「この人も何かそれなりの事情があって利用しているのだろう」と、温かく見守っていただければ、とてもありがたいですね。

最後の話です。これもまた失礼な言い方になるかもしれませんが、図書館の敷居をぜひもっと低くしてほしい、と要望したいのです。

これも私の思い込みにすぎないかもしれませんが、けれども、図書館は遊びが目的で行ってはいけない場所だと、利用者も図書館の人も考えているような気がします。読書をするとか、調べものをするとか、真面目な目的で行かなければならない、そう思われているのではないかと。

こんなことを言うのは、私自身のことに関係があります。私の商売道具の辞書というものが、世間の人からとても真面目なものと思われており、そのことに大いに不満を抱いているからです。「真面目」はいいことですが、真面目な人は敬遠される面もあります。「辞書というのは真面目で、読んでもつまらない、神棚に祀り上げておくものだ」とみんなが思うようになると、辞書は利用されなくなり、売れなくなります。これでは困ります。

辞書も、図書館も、お勉強のツールということで、同じように敬遠されている部分はないでしょうか。そうした敷居の高さが、利用者を遠ざけているところはないでしょうか。

辞書に関してもっと言いますと、辞書を敬遠したがる人々の気持ちに、私は何とか風穴をあけたいと思っています。辞書は必ずしも勉強のためのものじゃないよ、読むとおもしろいよ、ということを広く伝えたいのです。そのおもしろさとは、必ずしも学問的なおもしろさではなくて、純粹に笑えるところが多いんだ、ということ世の中の人に訴えたい。

そこで、私はほかの有志の方たちと共に、2014 年から「国語辞典ナイト」というエンターテインメントのイベントを開催しています。すでに 7 回目を数えています。

会場は渋谷の東京カルチャーカルチャーという

イベントハウスで、観客は130人前後といったところ。国語辞典をさかんに、聴衆の笑いが絶えないトークショーを展開します。テーマは辞書なんです、学問的なことは一切言わないようにしましょう、笑ってもらうことを第一としようと考えています。

例えば、今年8月に行ったイベントでは、新聞社の校閲の方をお招きして、「校閲ってどういう仕事ですか」「何かおもしろいエピソードはありますか」などと、いろいろな写真や新聞記事の実例などを交えて話しました。校閲の爆笑ネタを、国語辞典と絡めて紹介しました。

ゲストは毎日新聞の校閲記者の平山泉さん。レギュラー陣として、私のほかにライター<sup>ライター</sup>の西村まさゆきさん、古賀<sup>ちかこ</sup>及子さん、若い校閲者の方々が登場しました。登壇者の面々は、とにかく聴衆を笑わせることを追求していて、お勉強色というのはほとんどありません。それでも、辞書の魅力、今回で言えば校閲という仕事の魅力は聴衆に伝わったと思います。

辞書の話でそんなに笑うところがあるのかと、不思議に思われるかもしれませんが、アイデア次第で、エンターテインメントとして成立します。お勉強のためのイベントではなく、楽しくて、みんなが参加したくなるようなイベントにするというのが、我々の狙いです。

「何だかよくわからないが、おもしろいことが行われる」という場所には、多くの人が集まって来ます。中には、「自分は別に辞書には興味ないけれども、友達がおもしろいと言うから、一緒に来てみた」という人も多く含まれます。そういう人々が、「なるほど、辞書って本当におもしろい」と思ってくれば、辞書ファンが増えます。もしかしたら、辞書がもっと売れるかもしれないですね。

参加費は2500円程度です。安い金額ではありません。

私だったら、そんなにお金を出すなら、うちで寝ているほうがいいと思うんですが、皆さん、何か笑えることをやると期待して、来てくださるんです。

出演者側として、いろいろ知恵を絞ってみると、辞書には観客を喜ばせる要素がたくさんあります。言葉の説明がおもしろいとか、辞書をつくる人同士のライバル物語がおもしろいとか、いろいろ笑える要素があります。

こういうイベントなど通じて、「ひとつ本屋さんで辞書を買って来るか」と思ってもらえれば、つくる人も使う人も、みんなが幸せになります。

図書館のことに話を戻しましょう。私は、自分の家族や周囲の人に、もっと図書館に親しんでほしいと思っています。ふだん本なんか読まず、図書館は勉強する所だと思って人々にとって、楽しめる企画を多く実現していただきたいのです。

現在でも、図書館では、おそらくいろいろな企画、イベントを開催されていることと思います。子ども向けのイベントの案内を拝見することもしばしばあります。でも、たとえば、大人が休日に連れ立って参加してみたいような企画は、あまり聞きません。

「ふだん本は読まないよ」という大人は、意外に多いですね。そういう人が、「ちょっと行ってみようか」と思わずその気になる、図書館関連のイベントがあればうれしいと思うのです。いかがでしょうか。

本日の話はこれで終わりです。ご清聴、まことにありがとうございました。



## 《質疑応答》

○参加者 A 氏 区立図書館に勤務しております。今日のお話で、私は辞書をつくる部分に非常に興味を持ちました。「アオザイ」のところで、第7版の語釈に「切りこみ」という言葉があり、その後、第8版の検討中の原稿では「スリット」という言葉になり、「切れこみ」と注釈がついていました。

私は公務員なので、議会の答弁などでは、「横文字を多用するな」とよく言われます。

今の例でいくと、語釈に横文字を入れているのはなぜだろうと思いましたが、その点をお伺いしたいと思います。

○飯間 言葉の説明のときに、横文字を使うとわかりにくくなるということがあります。カタカナ語には、わけのわからないものが多いですね。一方で、例えば、「水準」というよりは、「レベル」というほうがわかりやすいなど、実は、カタカナ語のほうが、若い人、一般の人にわかるということもあります。

辞書の説明というと、これまで頑なに外来語を排除して、和語や漢語で説明するようになってきました。でも、私はそこにだんだん疑問を持つようになりました。

辞書の説明を読むのは一般人ですから、一般人にはどういう言葉が最もわかりやすいかということに着目すると、外来語も排除はできません。

あるいは、外来語ではありませんけれども、例えば、今まで赤ちゃん、赤子のことは「赤ん坊」と表現していました。ところが今や、「赤ん坊」は日常語ではないですね。みんな「赤ちゃん」と言います。我々の辞書にも「赤ん坊」という箇所が多かったのですが、それをひとつひとつ検討して、なるべく「赤ちゃん」としました。「赤ちゃんの着る服」のほうが、「赤ん坊の着る服」よりも読者の頭に入っていきやすいでしょう。これと同じ理由で、外来語も排除できないということです。

○参加者 B 氏 都立中等教育学校で学校図書館司書をしております。

本校の中高生、特に、中学生はインターネットを使わないので、紙の辞書を使っています。けれども、高校生になると電子辞書、あるいはスマートフォンで調べることが多くなってきます。

そこでは無料の辞書があり、先ほどのお話で、『三国』にもスマートフォンのアプリ版があるけれどもなかなかシェアを伸ばせないとお伺いし、これから先、辞書編さんがペイしない状況になるのでは、という懸念があります。

そうすると、さらに新しい辞書を編むにもお金をかけられなくなり、また利用者がどんどん減少していってしまい、辞書文化が先細となってしまうのではないかと心配をしているところです。

特に電子辞書などは、一時期、とても安い値段で販売されていたことを考えると、これから先の辞書編さんはどうなっていくのでしょうか。

○飯間 率直に言って、状況は大変厳しいです。辞書の売り上げは、この20年で半減以下になっています。あと10年たつとゼロになるのではと思うほど、状況は厳しいです。

従来どおりの辞書のつくり方を続けていると、おそらく辞書は滅びるでしょう。今はネットがあ

って、簡単に検索できるという状況が生まれている中で、それでもなお、辞書をつくっていくにはどうするか。他にはない、まったく新しい辞書、お金を出して買いたくなる辞書をつくるしかありません。そして、それはできるだろうと考えています。我々辞書のつくり手は、その方向に動き出しています。

それでもなお「辞書は1種類か2種類だけがあればいい」ということになったら、我々は転職するしかないでしょう。日本には『大辞林』『大辞泉』という2つの辞書だけが残った、『広辞苑』も消えたということになるかもしれないですね。人々がそれを選択するならば、それはしょうがない。

ネットの辞書だけではなくて、ほかにもおもしろい辞書があるということを宣伝することも必要です。「国語辞典ナイト」のようなイベントも、積極的に展開していかなければならないと思っています。

○参加者C氏 区立図書館の職員です。辞書の出版社それぞれの特徴などがあれば、教えていただきたいです。

○飯間 これも多くの人に知ってほしいことです。主な辞書について説明しましょう。

『岩波国語辞典』は、近代文学、明治や大正、昭和の文学を読めるように編さんした、と編者自身が書いています。『岩波』には、ちょっと古めの言葉が入っていますね。

『新明解国語辞典』も結構古い言葉が入っています。こうした古いほうを大切にするグループがあります。

一方では、新しい言葉というか、現代の生活で使われる言葉を大切にするのもあって、それが『三省堂国語辞典』や、『明鏡国語辞典』です（追記：この後、『三省堂現代新国語辞典』の第6版が、ネ

ットの俗語などを多く載せていることで評判になりました）。

ざっとこのように、古いほう重視か、新しいほう重視かで分けることができます。

あるいは、言葉の間違いに厳しいかどうかで分けることもできます。

『明鏡国語辞典』は、新しい言葉に力を入れているのと同時に、言葉の○×を厳しく指摘していて、「この言葉は間違いです」と書くことがしばしばあります。

一方で、「間違いです」と言い切ることに慎重なのが『三省堂国語辞典』です。いろいろ調べてみると、間違いと断言するのは非常に難しいのです。そこで、「俗語」とは表示するけれども、「間違い」とは書かない、ということが多いですね。

○×を厳格に考える辞書は、『明鏡国語辞典』のほかには『岩波国語辞典』が代表的です。一方、○×を分けるのは難しいと考える辞書として、『三省堂国語辞典』のほかには『広辞苑』があります。

『広辞苑』が○×に慎重というのは、意外かもしれませんね。この辞書は、規範の中の規範みたいに思われていますが、「誤り」と書くことが少ないのは知っておいていいでしょう。

時間になりましたので、これで終了にしましょう。ありがとうございました。（拍手）